

# 熊本は 立ち上がる

## 震災後の状況

今回の地震は、阪神・淡路大震災級の大きな地震が2回も続けて起き、発生から約4カ月が経った8月20日時点でも2000回以上もの余震が続いているという特徴があります。これまでにないタイプの地震であり、対応がとて難しかったと思っています。

地震直後、行政が取るべき対応にはいくつかの段階があります。まず、何よりも優先されるのが、人命救助。次に水や食料、避難所の確保です。その次に仮設住宅の建設など、住まいの確

突然、熊本の地を襲った2回の大地震。この難局にいかにして対応したのか。また、この地震をきっかけに、熊本はどのように変化を遂げていくのか。陣頭指揮を執る熊本県の蒲島郁夫知事に、今までとこれからを語っていただきました。

## 熊本県知事 蒲島 郁夫

かばしま・いくお●1965年熊本県立鹿本高等学校卒業後、地元農協に勤務。1968年に農業研修生として渡米し、1974年米ネブラスカ大学農学部卒業。1979年米ハーバード大学大学院を修了、政治経済学博士。筑波大学教授を経て、1997年東京大学法学部教授、2008年東京大学名誉教授。2008年より現職。



保。これらの段階まではおおむね対応が終わったと考えています。また、

民間の方々も手を尽くしてください、鉄道や空港、コンビニエンスストア、スーパー、電気、ガスなどの社会的なインフラの復旧がとても早く、安心感を与えてくれました。

## 復旧・復興に向けた 三つの原則

復旧・復興にあたって、地震発生直後に三つの原則を掲げました。第一は、被災された方々の痛みを最小化すること。第二は、単に元の姿に戻すだけでなく、創造的な復興を目指すこと。第三は、復旧・復興を熊本のさらなる発展につなげることです。

第一原則である痛みの最小化を図るため、例えば仮設住宅では四つのことを実行しました。一つめは、県産材を使った木造住宅にして、優しさや温かみを感じられるようにしました。二つめは、仮設住宅団地に「みんなの家」という木造の集会所を建てて、コミュニケーションの場にしました。三つめに、少しでも隣の棟との距離に余裕が出るように、仮設住宅の敷地にゆとりを持たせました。四つめに、避難している方々の要望を受けて、ベットとの

同居を可能にしました。

震災直後で、職員が人命救助、水などの確保に奔走しているなか、このような原則を打ち出すことは、実はとても難しいことなのです。それでも職員は率先して取り組んでくれました。

## 将来を見据えた 復旧・復興プラン

刻々と変わる状況に行政がしっかりと対応しないと、被災者の方々の不満と不安が募ってきます。目の前の事態に対応しつつ、将来的な展望を描くことが必要です。そこで、「くまもと復旧・復興有識者会議」を設置しました。座長には、東日本大震災復興構想会議の議長などを歴任し、神戸大学の教授だったときには阪神・淡路大震災を経験された五百旗頭真先生に、震災発生から2日後にご就任をお願いしました。五百旗頭先生には2012年から熊本県立大学の理事長にご就任いただいております。経験と見識のある方が近くにいたことに縁を感じます。こうして7名の有識者の方にまとめていただいた提言を踏まえ、県として8月3日に「平成28年熊本地震からの復旧・復興プラン」を策定しました。このプランを通じて実現したい熊

本の将来像とは、「災害に強く誇れる資産(たから)を次代につなぎ、夢にあふれる新たな熊本」です。それは、「将来が夢にあふれ、希望に満ちた熊本(Hope)」、「災害に強く、安全安心に生活できる熊本(Safety)」、「熊本の宝が継承され、誇りに満ちた熊本(Pride)」、「経済的に安定し躍動する熊本(Economy)」という四つの要因で構成されます。これらを通じて、県民の幸福量を最大化していきたいのです。

重要なのは、痛みの最小化を目指した早急な対応です。これには四つの柱があります。一つめが「くらし・生活の再建」。被災者に寄り添って、住まいや医療・福祉などの生活を再建していきます。二つめが、「社会基盤の復旧」。道路や鉄道をはじめ、防災拠点としての機能など、熊本の基盤を再生していきます。三つめが、「地域産業の再生」。観光や農林水産業などの経済基盤を再生させます。四つめが、「交流機能の回復」。空港や港などの復旧と機能の強化を進めます。私の任期が終わる2020年までには一通りのめどをつけておきたい。創造的復興の実現にはかなりの費用がかかるのですが、将来への投資でもありと考えています。



震災直後に設置された災害対策本部会議

## 「次」に備える

今回、痛感したのは、熊本には大きな地震は来ないと過信していたのではないかとということです。南海トラフ地震のときには、九州の広域防災拠点として他県の支援に回ることを想定していました。阪神・淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災などの大きな地震の経験から学んで、困難な事態にも対応できる力をつけておく必要があります。

今の熊本ができることは、スムーズにできたことやうまくいかなかった課題をアークイブとして残しておき、発信すること。他の県とも共有するのはもちろん、次世代にも語り継いでいかなければなりません。

## 熊本の観光を立て直す

熊本の復興のためには、多くの観光客に来ていただくことが欠かせません。天草、人吉、阿蘇の黒川温泉など、比較的被害が少なかったところが数多くあります。熊本に遊びに来るのもボランティアですよということを皆さまでにぜひお伝えしたい。来てもらえれば、復興した後でもう一度、来てみようということにもつながると思います。

## 熊本の天空港構想

もう一つの重要な玄関口である阿蘇くまもと空港については、熊本の百年の礎を築くという観点から、これまで、阿蘇くまもと空港の地理的優位性や周辺地域の美しさを生かす取り組みである「天空港構想」というものを進めてきました。

これは、阿蘇くまもと空港とその周辺地域を一体的に「天空港エリア」としてとらえるもので、「日本一広く美しい空港」の実現を目指して、東アジアや日本全国との交流拡大などさまざまな取り組みを行ってきました。

その成果として、国際線では、これまで定期便は韓国・ソウル線の1路線だけだったのが、2015年、台湾・



観光のシンボルとなるのはやはり阿蘇と熊本城で、有識者会議では「人類的な資産」と表現されました。今回の経験から、熊本の観光資源が失われると、九州全体に影響があることを実感しました。阿蘇へのアクセスにはミルクロード、グリーンロード等の代替ルートがあり、これまでのメインのルートとは違った阿蘇を発見できるでしょう。また、熊本県と大分県にまたがる阿蘇くじゅう国立公園は、国が特別に力を入れるナショナルパーク構想のモデル地域に選定されました。熊本城については、ラグビーワールドカップと女子ハンドボール世界選手権大会が熊本で開催される2019年を見据え、天守閣と公園部分を復元させた。櫓や石垣に関しては、何十年かかってでも歴史に忠実に復元をやり遂げたい。その過程も見えるようにして観光資源にしたいと考えています。

高雄線と香港線の定期便が新たに就航し、一気に3路線となりました。国内線では、県内初のLCCであるジェットスター・ジャパンが就航しました。また、天空港エリア内のJR肥後大津駅まで「空港ライナー」という無料のタクシーを運行しており、熊本駅や阿蘇・大分方面と空港を結ぶ交通手段として定着してきました。

さらに、九州を支える広域防災拠点の空港機能として、空港に隣接する県有地に県営の防災用駐機場を整備しました。

しかし、今回の熊本地震により、益城町にある阿蘇くまもと空港もターミナルビルが大きな被害を受けました。

そのため、甚大な被害を受けた阿蘇くまもと空港をはじめとした益城町、西原村および熊本市東部地区の創造的復興を推進するブランドデザインとして「天空港構想(Next Stage)」を年内を目途に策定します。

## エアラインへの期待

空港において中心的な役割を果たすエアラインは、災害時にも大きな力になりました。JALにも、イオン株式会社手が配された毛布の輸送、災害支援者の無償での渡航の支援など、被

## インバウンドを呼び戻す

これまで、外国人の宿泊者数は非常に順調に増えていました。2013年が42・3万人、2014年が48・3万人、そして2015年が69・7万人。ホテル・航空券などのオンライン予約を手がける世界最大規模のサイトによると、増加率が日本一だということです。2016年は残念ながら人数が落ち込んでしまうでしょう。それを抑えなければなりません。

そのためには、くまモンを使ったプロモーションがとても有効です。アジアでも人気が高く、ロイヤリティフリーで自由に使っていいという旅行会社などが自らプロモーションをやってくださるのです。また、県では「観光復興会議」を設置し、おもてなしの手法や観光のコンテンツの掘り起こしについて議論しました。さらに近年、急激に増加しているクルーズ船の寄港に対応するため、玄関口となる八代港の整備も急がねばなりません。

これまでの宿泊者数の伸び率を見ると、熊本に行きたいという外国の方のニーズは確かにあるのです。その人たちに働きかけをしていくことで、熊本のみならず九州全体の観光にも大きな力が出てくるのではないのでしょうか。

災害者のニーズに即した支援をいただき、感謝しています。

今、最も大きな課題は、熊本に観光客を取り戻すことです。九州観光推進機構が推進する、九州への旅行商品を大幅な割引で提供する「九州ふっこう割」などを活用した復興に、引き続きJALにも協力していただきたい。また、2019年の国際スポーツ大会をきっかけに世界中から人を集めるためのネットワークをつくり、熊本のみならず九州の発展に力を貸してほしいと思っています。

## 熊本から伝えたいこと

地震の経験を通じて学んだことは、当たり前だと思っていた普段の生活がいかに貴重であるかということです。朝、起きてご飯を食べる。お風呂に入る。灯りを点ける。これらを取り戻すのはとても難しい。そんななか、日本全国、世界各地から温かい支援の手が差し伸べられていることを、私たちは非常に心強く思い、力を得ました。熊本県は今、感謝の心でいっぱいです。私たちは一歩ずつ、復興に向けて頑張っています。ありがたうの気持ちをこれからのおもてなしにつなげていきたいと思っています。



阿蘇くまもと空港



天草



阿蘇



復元を目指して動き出す熊本城